Welcome Flower

迎え花

おもてなしの心を映す

市井のいけばな春夏秋冬

第八十四回 割烹旅館ゆめさき

花材：ネコヤナギ、ガーベラ、ツバキ、スターチス、アルストロメリア

建築と花

書院造りや数寄屋造りが伝統的な建築様式を表す言葉としての双璧であり、前者は剛的で儒教に、後者は柔的で老荘思想にそれぞれ紐付いている。近世までに成立した二つの型であるが、そもそも建物には、家主の社会的属性を表すメディアという側面があった。門のかたち、柱の形状、欄間の模様、床の間のしつらえ、そして庭の樹木等々は、そこに居る人物が何者なのかを示す名刺のようなものであった。

別府の『割烹旅館ゆめさき』を訪れる。緑青を吹いた銅板が乗った門をくぐった路地で、鮮やかな山茶花（サザンカ）が揺れている。玄関の引き戸を開けるとアプローチが続き、両脇に砂利が敷かれ打ち水がされた石畳を歩けば、船底天井が頭上を覆う。内と外のあいだのような空間を進み「いらっしゃいませ」の声に促されて靴を脱ぎ、ようやく屋内へ入った。建物は軽やかな数寄屋が基本だが、座敷など所々に書院の威風を感じさせる。そして近年改築されたモダンな空間が今の〝好み〟を演出していた。

「玄妙へ至るための関門」。玄関の語源だが、砕いて言えば、扉の奥には本質があるということ。ではその本質は何かと言えば、すなわち「気候風土」であって、そしてその顕現が奥座敷の床の花ではなかろうか。あくまで私見である。

女将としてこの宿を切り盛りする佐藤志穂さんは華道を習って1年だというが、入門者用の花器が初々しくも実に堂々とした花である。花の姿に並んで埃（ほこり）ひとつ見当たらない館内も、すべては内面の写し鏡である。建物は属性を示すハードメディアに違いないが、それがどのように耀くかは家主の心の次第ひとつなのであった。

割烹旅館ゆめさき

別府市鶴見園町5組の1
TEL 0977-22-3008

文章・写真 渡辺航（わたなべこう）

1977年生まれ、別府市在住。
出版社勤務を経て、現在はフリーで編集、撮影、取材執筆などを行う。
2024年3月 新刊著書「此君亭好日」発売。